

2010年
1月6日
水曜日

「経済と倫理」 ―消えた倉敷チボリ公園―

舟木 讓 准教授（宗教哲学・キリスト教学）

2008年12月31日、岡山県倉敷市の旧倉敷紡績工場跡を借りて1997年に開設されたテーマ・パーク「倉敷チボリ公園」がその歴史に幕をおろした。跡地は、今流行りのショッピングモールとなることが正式決定し、施設は取り壊されることとなった。ただ、今回の閉園は、単にバブル経済時のずさんな計画に踊った一施設がそのつかけを払ったというにとどまらず、日本における新しい文化の醸成と維持ということに対して一つの問題提起となったのではないかと思われる。

「倉敷チボリ公園」は当初、岡山市制百年記念事業として岡山市に建設予定であったが、計画のずさんさ等が発覚し経営見通しが立たないとの理由でいったん白紙に戻され、その後、その計画を岡山県と倉敷市が引き継ぐ形で実行されたという少し

複雑な開設経緯を有している。一方この施設の特徴は、「チボリ」という名前が示す通り、デンマークのコペンハーゲン中央駅すぐそばにある世界最古のテーマ・パークと言われる「チボリ公園」との提携で設計や運営が進められた点にある。そのため園内の施設はコペンハーゲンのチボリ公園内の施設を規模の差こそあれ、極めて忠実に再現し、さらに、本国では公園の外にあるアンデルセン像や、コペンハーゲンの北にある有名な人魚姫の像のレプリカが園内に飾られてある。また、園内の売店では、デンマークの有名なビールであったり、屋台で「フレンチドック」として親しまれている軽食を「デンマークドック」という名前で安価に提供したりして、日本に居ながらにして、本場の雰囲気をも十分に味わえる良質な施設であったと言いうる。

加えて、18世紀の古いコペンハーゲンの街並みを重厚に再現したエリアもあり大人の鑑賞に耐えうるテーマ・パークとなっていた。しかし、当初の計画時に岡山市が懸念した通り、来場者は減り続け、また、借地権の更新期限を迎える中で、廃園を余儀なくされたのであった。もちろんそこに至るまでに企業努力がなかったというのではない。一例をあげれば、従業員の方が中心となって園をもりあげるために「TE（チボリ・エンターテイメント）」という役割を分担し、踊りやジャグリング等をプロの方と共に担って、危機を乗り越えるべく、献身的な働きを続けてこられたということもあった。しかし、今回そうした努力と継続を祈る気持ちも適わず、多くの従業員が転職を余儀なくされたのであった。

開設計画時から開園にいたるまでの計画のずさんさや不透明さが、当時から今日にいたるまで倉敷市議会等で糾弾されており、そうした部分は公正に解明された上で、責任の所在が明らかにされねばならないのは当然である。また、経済活動は言うまでもなく、利益の追求が前提になっているが、文化の熟成と維持発展が我々にもたらす、目に見えない豊かさを忘れたとき、我々のさまざまな営みが持つ深みが失われていくように思われる。社会の構造や不正から生じる格差や経済的な貧困は当然解消されるべく不断の検証と改善は不可欠であるが、そうした健全な経済的営みとともに私たちに精神的な豊かさを与えてくれる文化を維持する知恵を育むことの重要性を今こそ認識する必要があるといえよう。